



マジカルリトル★  
Magical Little W Mama  
おっぱい  
ザブルママ



小説 葉原鉄  
挿絵 FCT

二次元ドリーム文庫 / PDF立ち読み版

序 淫夢に酔いしれ鬼退治

第一章 魔法少女の拉致監禁

第二章 ちびっこ×2はママさんメイド

第三章 ちっちゃな忍と悪の大魔道

第四章 マジカルファミリー大乱交

006

026

079

140

193

## 登場人物紹介

Characters



### つくよみ しのぶ 月読 忍

母親・朔に欲情する自分に悩む少年。息子として母を愛する気持ちも強く、母への邪念を断ち切ろうと剣術に打ちこんでいます。

### ヘカティ・ルナ / つくよみ さく 月読 朔

小さな女の子の外見をした忍の育ての母親。口が悪くぶっきらぼうですが、さり気なく息子を思い遣ることのできる女性です。

### シャイニー・セルマ / あまの てるま 天野 輝真

光の魔法少女。「愛は世界を救う」をモットーに、無差別に縁結び魔法を連発する天然暴走娘。

### むさし おりえ 武蔵 織枝

クールで生真面目でボーイッシュな忍のクラスメイト。不純異性交遊に難色を示す学級委員長です。

### たかつ どかえ 高津戸 楓

学園一の美人として有名で高慢なお嬢様。

### ザナス・イー

かつてセルマによって打ち倒された大魔導師。寿命や性別から解放された高次存在。

気が付けば朝になっていた。

窓から差しこむ光がまばゆい。頭がズキズキする。

「うう……母さんひでえ、こんなの遠足の前日に眠れないって相談したとき以来だ」  
上半身を持ちあげて、痛む頭を右手で、うづく股間を左手で押さえた。

よい朝勃ちだ。このところ四六時中セルマが付きつきりでオナニーもできないから、海綿体に血流が行き渡っただけで身震いするほど性感帯が熱くなった。

ふと気づく。硬いペニスが、手に直接当たっている。ズボンはおろかパンツも穿いていない。布団の中で忍は全裸だった。

ピロリロリン、と軽いイントロが聞こえた。壁の液晶画面が輝きを放つ。

『息子のムスコがグッモーン対決』

「よおーし、最終決戦！ 負けないからね、ルナちゃん！」

「おうよ、こうなったら意地だ！」

メイド姿の魔法少女たちが布団をはねのけ、忍の股間に顔を寄せてきた。

「お、おいコラあんたら！ まさか夜通し勝負してたのか！」

「ママはね、シノくんのこと殴って寝かせるような魔女には絶対負けられないの！」

セルマは眉を吊りあげ、朝からこんもり隆起した赤肉の塊をギョツと驚つかみにする。しかし白魚のような細指にこめることのできる力など、鋼のごとく硬化したペニスにはた

だの快感に他ならない。

「アタシはコイツを多少いためつけたからってへこたれる程度の育て方はしてねえんだよ！ な、シノ！ こういうことしても平気だよな！」

朔は頬を怒りの色に染め、口を軽くもごもごと蠢かせてからヨダレをたっぷり亀頭に垂らした。泡だらけの唾液を紅葉のような手で粘膜に揉みこみ、残った手の指先で鈴口をぐりぐりとマッサージする。

どちらにもスベスベの肌をしているので、摩擦感には極上のまろやかさが付随していた。

「あ、くっ、うう……！」

数日に渡って睾丸に溜めこまれた膿が、いきなりの手淫に暴れだす。射精こそ堪えたが、透明な先走りは忍耐力の隙間を抜けて横溢した。

「うふふ、お手々がネバネバしてきちゃいました……」

「だらしな過ぎ、シノ。ほら、もっとガマンしろ」

ふたりはさらに股間へ顔を近づけてくる。醜く青筋ばった巨根と並ぶことで、白いヘツドドレスで清楚に飾られた童顔たちはますます愛くるしさを増した。

わずかにお姉さんに見えるセルマが、口を小さく開いて舌を出す。

「動物のママさんは子どものおちんちんが汚れてたら、舐めてキレイにするんですよ」

「い、いや、今はダメだ……！」

次の瞬間、亀頭に容赦なくびちゅびちゅと水音混じりの搔痒感が湧いた。手淫で敏感に

なっているせいとか、すこし舌先で擦られただけで脳を殴りつけられているような快感が湧いて、腰が浮いてしまう。

彼女は横目に朔を見やり、「アナタにはできないでしょ？」とでも言うようにフフンと鼻でせせら笑った。朔に対してこういう態度はまずい。子どもあつかいや妹あつかい同様に、見下されるのが大嫌いなのが月読朔という女性なのだ。

「セルマ、今までに一度でも細々こまこましいことでアタシに勝てたことがあったか？」

朔は半眼で視線を返したかと思うと、忍に白い歯を見せてイタズラっぽく笑った。唇が向かう先は、セルマの舐めずる汚茎の根元。うずきっぱなしの貯蔵タンクだ。

「なあ、ご主人様……メイドのおねだり聞いてくれないか？」  
う。忍はうめいた。ご主人様とは、あまりにも新鮮すぎる。

「ご主人様のお、チンポ汁たつぶりのおつきなキンタマ、アタシのちっちゃいお口でおしやぶりさせてくれないかなー？」

セルマへの対抗心からくる演技であっても、舌つ足らずに甘えた口調がたまらない。チユツと軽く吸われただけで、玉袋の内側に総毛立つような愉悦が走った。

「や、優しくしてくれるなら、ぜひお願いします」

「へへ、素直なご主人様だな……かーちゃんメイドがたつぶりご奉仕してやるぞ」

育ての母が醜く垂れ下がった皺袋の前で卑猥な色の口内粘膜を晒す様を、忍は情熱的な目で舐めるように眺めた。

(玉まで母さんが愛してくれるなんて……この生活、やっぱり悪くないぞ)

煮沸した鞆丸がぱっくり唾えこまれた瞬間の感動たるや、思わず涙ぐむほどのものであった。股ぐらに顔を埋めてヂュパヂュパッと玉袋をしやぶり回すふたりの——いつの間にかふたり分になっていた小さな頭を愛しさのままに撫で回す。

「セ、セルマさん、なんでアンタまで」

「らって、ルナひゃんぱっかりじゆるいもん」

セルマが自分の頬で朔の頬をプニプニと押し潰しながら、片玉を啜りこんで唾液たっぷりに口舌愛撫をしている。

「こ、こら、優ひくひてやれよ。ここでりけーとなんらからな」

朔は頬裏と舌で圧迫と弛緩をくり返しながら、手では竿肉をしごいてくる。どちらも微弱な快美感を長く持続させるような、いたわりの感じられる優しい愛撫だった。

「あ、ああ、母さん、うまいよ……く、夢とおなじですごく上手だ……!」

「わ、わらひらってそれくらいれきるもん!」

セルマが口をモゴモゴさせながら亀頭に手をあてがった。指遣いが緩やかで握力も優しいものの、知ってか知らずか神経過敏なカリ縁を集中して擦ってくるので、火照った海綿体はたちまちの激しい愉悦に焦がされる。

硬軟合わせた手コキに鞆丸のこそばゆさが加わり、快感指数が一気に跳ねあがった。

「うあッ、もう出る……くっそお……!」

頭の奥が閃光で白み、朝一番の気力が下腹を駆けめぐる。ペニスの根元と鈴口が一直線の灼熱感で貫かれたとき、忍はふたりの頭皮に爪を立てた。

びゅぱッ、びゅくんッ！　びゆるうッ！　どびゅ！　びゅっ！　びゅんッ！

悦楽のエキスが尿道を舐めずり飛び出していく。朔でなくセルマの手つきが契機となつたことはすこし悔しいが、もちろん射精は自分の意志でおいそれと止められるものではない。さらには寧丸が軽く圧迫されて、沸騰汁が次から次へと押し出される。

「あはっ、朝からゲンキゲンキですね。ママが何回でもイカせてあげますよお」

「無節操に顔射しまくりやがって……子どもみたいな顔にぶっかけてきて幸せか？」

当然のごとく幸せであるが、連続のオルガスムスがつらくて肯定も否定もしていられない。ただただ肉棒が溶けるような熱と愉感に歯ぎしりをする。

セルマはスレンダーな少女体型に違わず顔も小さくて、朔に関してはスレンダー以前の幼児体型だから顔もいっそう小さくて丸っこいので、大量の精液を浴びれば瞬く間に白く淫らに覆われていく。効率的に汚されるための小顔ではないかとすら思えた。

一方の顔は初体験の昂揚感を、一方は直腸を犯してよがらせた興奮を、それぞれ脳裏に蘇らせてくれるのだから、股間へ向かう血流は否応なしに勢いを増す。

母親にして魔法少女でもあるちびっ子たちは、すでにバック状態で汁まみれの顔に上から新たにぶちまけられても、留まることなく次の性戯に移行した。

手コキを竿の根元から中ほどの範囲に集中させ、龟头全体に舌を絡めてくる。

「んりゅっ、ちゅろっ、ほーら、ママのペロペロ気持ちいいですよね？」

「んむっ、れろお、ちゅくっ、シノは裏筋をクリユクリユされるの好きだよな？」

間近から口内に精液を注がれるのも折りこみ済みのようで、ヨダレのように白濁がこぼれてもお構いなしに雄膜をなぶり回す。

「ほっ、ぐっ、おとおっ！ これすごっ、すごい、けどお……！」

法悦の極みでさらなるフェラチオを受け、亀頭の性感が焼けただれていく。ベッドの上でのけ反りすぎて、背筋が今にもつりそうだった。もはや朝も夜も関係ない。快感に溺れて窒息しそうな心地である。

そんな忍の感悦ぶりをメイドたちは嬉しげに眺め、小さなお口とお口で紅蓮の肉頭を奪いあう。前髪からの滴りで両目を塞がれて、舌と舌が触れあっても気にせずひたすらしゃぶり回していた。粘っこい肉笛の演奏がどんどんポリュームをあげる。

「あちゅっ、ふむうん、ルナちゃん邪魔あ！ ぢゅびっ、んちゅっ」

「そっちこそ、れるっ、ちゅるっ、シノのでかちんぽから口離せ！ んちゅぢゅっ」

朔がピュッピュと噴水のあがる鈴口に口を被せて吸飲すれば、セルマが横から舌を滑りこませてディープキスをするようにして横取りする。気がつけば舌と唇と亀頭が精液をつなぎにして離れなくなっていた。

まるで小さな姉妹の他愛ないお菓子の取りあいだ。どっちがよいとか悪いとか、忍にはとても判断できない。快感のあまりに頭蓋が亀頭とリンクして、脳髓を舐め回されている

ような錯覚に悶え狂っていた。

「あぐつ、うあああ！ もう無理、なんかヤバイのこみあげてきたあ……！」

どうにか射精が収まりだしたところなのに、寧丸はさらに持ちあがつて窄まりだす。

ふつふつと沸きたつ感覚が、幼い舌の餌食となつている海綿体に満ちていく。下腹がすこし引きつるようであつた。感もあるが、本能的な欲求がそれを上回つた。

(か、母さんのフェラで、もう一回だけ、イキたい……！)

つい一週間前までは朔に勃起するだけでも罪悪感があつたのに、今は横にセルマがいるせいか、妙に空気が軽くなつて深刻な気分が薄らいでいく。

忍は欲望のおもむくまま、己に巻きつく淫らな幼舌を汚しつくすことにした。

「す、啜つて！ ふたりとも、音立てて！ あああ、イキながらイクう！」

ふたりの頭を引きよせながら肉棒を突きあげた。

「えへ、いいよお、シノくんのぢゆるぢゆる下品に啜つてあげますね」

「ほんと変態ご主人様だな、シノは……飲んでやるからたくさん出せよ？」

言うやふたりはたがいの舌を絡めるようにして密着しながら棒先を舐め転がした。

ちゅばちゅばと激しい水音に愉楽の痺れが引きずり出され、忍のオルガスムスはさらなる高みに達したのであつた。

びゅぐびゅぐびゅぐびゅぐッ！ ばびゅびゅつ！ びゅー！ びゅううーッ！

噴き出すそばから亀頭の上をふたりの唇が左右に滑る。ちびっこメイドたちは頬を押し



あつて、交互に鈴口を啜っていた。小尻をもどもぞと蠢かせてスカートを可憐に揺らし、もつともつとほしがるように。

「んふうう、ひのふんの、ひゅっごい苦ひい……」

「大人の味らなあ……うまいろ、ひの」

唇を尖らせ舌を繰りながらの言葉は、妙に舌つ足らずで幼い口調になっていた。なにを言っているのかはわからないが、それはそれで忍の琴線に触れるのは確かだ。

「ふああ、母さんも、ママも、フェラすつごくうまいよ……！ ああ、全部出る、本当に一滴残らず吸い取られるう……！」

幼い口腔粘膜の熱に浮かされて、睾丸どころか内臓の搾り汁が尿道を通過して吸い取られていく。忍は陶然と夢心地のまま、肉棒が愉悅の頂点で痙攣する感覚を満喫した。

魔法少女二名のローションで密着と粘着がくり返され、一秒たりとて亀頭が空気に触れることはない。こんなに息が合ってるのなら、三人一緒に家族として暮らしてもいいのではないだろうか。朔もセルマがいたら対抗意識を燃やして、エッチなことを毎日のようにしてくれるかもしれない。

住まいはお城、股間は極楽。ご奉仕天国、ユートピアだ。

やがて生温かな粘膜の中で痙攣が静まると、ようやくふたりも口を離した。一滴たりとてこぼさないよう白濁パックの幼い頬をぶくつと膨らませ、上向き加減に口を開いて汚辱のプールを見せつける。

「ほら、見へみお……あらひのお口、たふたぷらお」

「わらひもお、ひのくんのれ、ひいっぱいらるお」

「う、うん、ふたりともありがと。俺、すっごい幸せ気分です」

忍は自分の精で手が汚れるのも厭わず、ふたりの顔を撫でながら親指で口腔をかき混ぜた。おぞましい粘つきが、ふたりを汚辱をしたという実感をいっそう強くする。

セルマは素直に無邪気な笑みを浮かべ、朔は今さら照れ隠しに目を逸らしつつ、結局は母乳を吸う赤ん坊みたいに親指をしゃぶりながら肉汁を嚥下していく。

きつとまずくて仕方ないだろうに、息子の体液だからと喉を鳴らすふたりがいとおしかつた。胸が高鳴って肺が痛むほどだ。

「なんか、今日一日はなんもする気が起きないな……」

全身がフルマラソンを終えた後のように疲労していた。

「またまたあ、シノくんったら謙遜しちゃって」

言いながら、セルマは萎えたペニスを頬ばりだす。

「ちよつ、も、むりつす！」

「もうちよいガマンしろ。アタシが勝つまでの辛抱だ」

朔の舌が裏筋を舐めあげ、無理やり快感を引っぱり出す。

ご奉仕天国あらためご奉仕地獄はこうしてはじまったのだ。

彼女の体内には、いまだ魔素が蠢いている。気づいたときには手遅れだった。

楓の手から放たれた魔法が、ヨーグルトみたいに濃厚な白色で世界を覆う。

忍は全身がとろけて散り散りになっていくような感触に襲われた。

「鏡に映した魔法をひとつだけ温存しておいたのよ！ こんなこともあるのかとね！」

楓は勝利を確信し、高らかに笑うが、それもわずか数秒のこと。

ふいに硬直し、ぎざぎざと首をねじって怯えた目を左右させる。視線の先々で、忍は身体が痛まないことに安堵の吐息を落としていた。

その吐息が、次々と連鎖していく。視界にたくさん、忍がいた。

「あんな、楓とやら……残ったのがセルマの分身魔法ってこと忘れてたんだろ」

朔は呆れ返り、魔法の力で大量増殖した息子を眺めていた。

「ふざきゃああああ！ ジジイが増えたああああああ！」

忍は絶叫する楓を多人数で押さえつけた。集団レイプみたいでちょっと嫌だが、これからやることを考えたら実際のところ大差ない。

「こうなったらやるつきやない。がんばるぞ、俺たち」

「正直なところ俺は母さんにチュッチュしたいけど、仕方ないからガマンする」

「俺もガマンするよ、偉いでしょ母さん？」

全員揃って思考回路はおなじ。目と目で通じあうこともできた。

楓の鼻をつまみ、口に指を突っこんで開けさせ、媚薬を流しこんだ。

「ひい、犯されるう……！ 年増男たちのねちっこい劣情にはあん、餌食つ、あんつ、うわあ、な、なんだか媚薬いきなり回ってきたっばいんだけどお！」

半泣きで息があがっている。元から扇情的な目つききの女性であったが、桃色に顔が染まるとまた色気が増す。媚薬の効果は今日も抜群だ。

身じろぎのたび弾む乳房もよい。唾を飲むほど色っぽいではないか。あれ？ と、首をかしげる。なぜか普通に巨乳でドキドキしている。

(退行したときのトラウマみたいなもんかな……)

朔基準でしか性欲を感じなかったころとは、なにかが違ってきていた。

当の彼女はホウキを抱いてへたりこんだまま、静かに目を閉じた。

「すこし休眠して回復する。セルマも自動的にそういう状態になってるから……」  
彼女は顎を落として眠りについた。好きにしるということだろう。

忍たちは母の気遣いに感謝しながら余った媚薬を手に絡ませ、三人の少女が身動きできないよう押さえつけて身体を撫で揉み回した。

驚かされたのは、ひとりが女体を揉みしただけで全員に触感が伝わることだ。感覚まで同調しているのだろう。忍たちは女の柔らかさにすぐ夢中になった。

「ひっ、ああ、小学生ぐらいのしのぶクンのちっちゃな手ならいいの……！」

楓の乳房はさすがの量感で、数人で揉みしだいてもまだスペースが余る。どこまでも豊かに形を変える柔軟性は圧巻だ。甘柿の種のように大きく膨らんだ乳首をさすると、それ

だけで楓の声は熟した果肉のように甘くとろけた。

「ああ……ひうんっ」

鼻にかかった声は、ザナスと織枝からも同時に発せられた。

なにかが引つかかる。ためにツンと上を向いた織枝の乳房の先を、獣毛で織られた水色の布地ごと優しくつまんでみた。すこし間を置き、ザナスの控えめな乳首を人差し指で擦り潰す。それぞれのタイミングで甘美な和音が鳴らされた。

「もしかして三人の感覚ってシンクロしてるのか？」

「ある程度は、私の命令が伝わりやすいよう神経と神経を接続しているのである……く、薬のせい、それがますます、鋭敏に……はあっ」

ザナスは悦感に耐えきれずに肩をすくめたが、まわりの忍が腕を無理やり開いた。小さな体軀にアンバランスなほど張り出した乳房が、若々しい弾力で跳ね回る。きめ細かな肌は汗を帯びて、琥珀のように艶やかに輝く。揉めば押し返す張りのよさが、忍たちの手の中で織枝の美乳や楓の爆乳の触感と混じりあっていく。

乱交状態なのに、まるで一対一で向きあっているかのようだ。

彼女たちをもっとよがせたい。もっと気持ちよくもなりたい。

人数分だけ乗算された欲望が胸だけで満足できるはずもなく、二の腕やわき腹、尻腿にも愛撫を広げた。どこもかしこも触り心地はまるやかで、忍の手つきに大きな身震いで反応するほど感度は良好。

尻の揉み応えは織枝が一番だ。スカート状の飾り布は大きく切れこんで尻の割れ目が見えているし、その下が前貼り寸前の小さな布地に紐をつけているだけの有り様では、ほとんど生尻を揉みたくることに等しい。

「んっ、んっ、ふ、ああ……ぼ、僕のお尻は、そんなに触り甲斐があるのかい？」

「あるよ、織枝さん。モチモチしてて重たくて、これはなんだか……」

後ろから思いきり犯したくなる。とは、さすがに言えないので口を濁した。

もちろん楓の尻肉も軟らかいし、黒レースのショーツが蒸れていくのも刺激的だ。

「ちよ、ちよっと、そのケツデカ女。あんまり感じないでよお……んくっ」

「んうう、な、なんであるか、これはあ……！ くはっ、あああ、焼けるうッ」

ザナスの感じ方も率直で、小臀部が揉みしだかれるたびに可愛らしい震えを増していく。骨盤の広がりには欠けた尻は、胸と違ってあきらかに幼い肉づきであった。スベスベの肌と繊細な肉づきに母の素肌を思い出し、忍はますますそそられていく。

手触りと喘ぎの声質からして、やはり彼女の肉体は基本的にあどけないようだ。

「ザナスってオナニーもしたことないだろ」

「わ、我はこの姿の年ごろにして魔道に目覚め、アルトスファイブ魔球殻を生み出すことで高位存在へと進化したのである。性欲は元より、月のものすら経験しておらぬ」

「じゃあ、魔法よりこういうのがずっと好きになるまでイカセまくるからな」

ザナスを後ろから軽々と抱え、膝裏に腕を引っかけて大きく開かせる。使い魔のふたり

の眼前で、慎ましい肉スジがかすかに割れて純真無垢なピンク色が覗けた。

幼い色に息を飲む織枝を、数人で四つん這いに押さえつけ、腰尻に食いこんだ紐下着を横にずらす。興奮気味の紅色が蒼い恥毛に囲まれて恥ずかしげにヒクついていた。

隣の楓は「バカ」だの「ジジイ」だのと減らず口を叩くので、あお向けのままM字に脚を開かせて、立場を思い知らせるために黒いショーツを噛み千切ってやった。

「ひっ、いやああ、大人の男はやっぱり不潔よお」

「むせるぐらい甘酸っぱい匂いプンプンさせていて、よく言うなあ」

成金お嬢の秘裂は爛れた肉色を晒し、ワンピースの裏地にまで滴りをこぼしている。こういう態度を表す四字熟語があった気がする。安西がよく言っていた。

そう——ツンデレ。いや、たぶん違う。これは熟語じゃない。

「痛いことはしないから安心してくださいよ。それにたぶん、このなかじゃ先輩だけが処女じゃないですよね？ だからがんばってもらわないと」

言いながら忍のうちひとりが、中指を楓の秘肉に突き立てた。媚薬でほぐれた媚襷の垢を奥まで貫かれ、楓は背筋を硬直させて震えあがる。

感悦は伝染し、織枝とザナスの腰も震える。忍たちは織枝の湿った肉唇から処女膜までを舐め擦り、まだまだ未熟なザナスに対しては陰核を集中的に指で擦った。

「くふうつ、あああああ！ 中あ、いやあ、ロリコンジジイの指マンで感じるなんてえ…  
…爆乳お姉さんに憧れる全国のチビッ子諸君ごめんなさあい…！」

「くっ、ああ、忍う、そこは汚れてるから舐めるのはあまり、感心しない……！」

「んっ、んっ！ 魔術の知識、抜けてくであるう……ああーッ、頭がしろいいい！」

処女らしきふたりにはソフトな責めを。ちびっ子相手に経験豊富な楓の膣内は中指でメチャクチャにほじくり返す。腹側の天井が敏感なようなので、たびたび指の腹で押さえつけてやると、三人がよがり声を重奏させる。

地面が濡れるほど垂れ落ちる愛液の匂いに、雄の棒先が角度をあげていく。

（か、母さんゴメン……性欲が先走ってますゴメンナサイ）

相乗された肉欲に抗えず、隆起したペニスを二人に擦りつけた。醜く青筋を浮かべたペニスと桃色に染まった女の肌のコントラストがたまらない。服の上からであってもお構いなしに、顔や胸はもちろんのこと手や脚にまで先走り塗りをたくる。

「こ、このジジイ、お、犯すなら、はやくしなさいよお……！」

楓は眉を吊りあげながら、精いっぱい股を開いて膣口で忍の指を締めつける。やっぱりツンデレなのか、魔法感受性の高さが性欲にも発揮されているのか。

「犯してほしいのは先輩のほうだろ。大人の太いチンポとか味わったことないくせに」

「か、勘違いしないで！ 大人ちゃんぼすっごく怖いわ！」

まんじゅう怖いという落語もあったはずだが、ここはツンデレということにしておく。ツンデレはエロいと安西も言っていた。隣できれいな額や異形の角を腺液で汚され、太い眉をうっとり垂らす織枝も、もしかしたらツンデレだろうか。

「し、忍……媚薬のせいだと前置きをしておく。これから言うことはただの気の迷い、気のミステイクだ。いや、今の言い回しは……ああもうなんでもいい！」

らしくなく取り乱したかと思えば、眼前に突き出された数本の男根へと、あろうことかみずから顔を突き出して頬ずりをはじめた。甘美な摩擦が龟头に走る。

「ぼ、僕はこれで、ずっと、犯してほしかったんだ……！」

織枝は大きな尻をみずから突きあげ、左右に揺らして誘惑までしてきた。頬ずりしていたペニスに対しては、いとおしげにキスマではじめめる。忍は粘膜が吸われて毛羽立つような愉悅に打ち震えるばかりで、意外な告白に答えることができない。

「僕よりずっと強くなったキミにレイプされるのを考えて、三日に一度はオナニーしてた……！ わ、悪いか！ ちなみにテスト期間中は週一に控えていた……！」

言い訳の仕方が朔との初体験を思い出させるので、忍は否応なく興奮した。

だれにでも秘密のひとつやふたつはあるものだ。それを解放する悦びは我を忘れるほど強烈なものである。母を抱いた日の忍とおなじような昂揚感が織枝を襲っているのだとしたら、もはや焦らされるのも限界だろう。

「だいじょうぶだよ、織枝さん。媚薬のせいだって俺はわかってるから」

忍の股間の蛇たちはもはや堪えきれずに、女たちの股ぐらへと首を伸ばした。楓と織枝のみならず、大魔導師の毛すらも見あたらぬ繊細な切れ目にまで。

「あああ、こ、これほど太いものを入れられたら、我のお腹が、それでギチギチになって

しまうのであるう……ふわあ、わ、我は、我はあ……」

あどけない姿を殻に隠して長い時を生きてきた少女も、眷属たちに感化されて驚くほど浅ましい目をしていた。左右で色の違う瞳は、雌らしい欲情に満ちている。

「入れるよ、みんな。ザナスはチンポの味しつかり覚えとけよ。もう二度と愛情のない世界なんて求められないぐらいセックス好きにしてやるから」

「きよ、許容できる提案ではない……我は、人類を新たな階梯へと……」  
「そういうのは身も心も大人になってから言いなさい！」

怒鳴ってやったのは、自分を鼓舞して不貞の罪悪感を誤魔化すためだ。  
弾みのついた状態で腰を押し出すが、それはザナスに対してではない。

「ひっ、んあああ……！ 大人チンポ入っちゃうう！」

熱い膣壁を蠕動させて、差しこまれた逸物を内側へしゃぶり呑むのは楓である。彼女自身はじめての大人サイズに目を剥くのはもちろん、まだ入り口をこすられているだけの織枝とザナスも敏感に感応して胴震いをしていた。

「くっ、ああ……！ こ、こんな気持ちいいこと、学生がすべきじゃ、ないい！」

「ひッ！ ひッ！ お腹膨れるのである……んふううッ！」

軽いピストンで大人の女の膣肉を味わう。朔やセルマにくらべて締めつけに余裕があり、襷粒がどのように絡みついてきているかをつぶさに捉えることができた。

（こ、これは、かなり気持ちいい……！ 実際キツイぞ、耐えられるか？）

今は自分が愉しむより彼女たちを墮落させないといけなのに、母ともママとも違った肉穴の快感に負けてしまいたくなる。おそらくこの内部構造は、じっくり味わうよりもすばやく擦ったほうがしのぎやすい。

「高津戸先輩のマ○コ、大人チンポしゃぶり回してるよ。そんなにおいしい？」  
強がりながら速めに腰を打ちつけると、三人の喘ぎが同調して高くなった。

「あんっ、ううう、子どもチンポのほうがおいしい！こ、こんな、ゴリゴリえぐってくるような、みっちり埋まっちゃうようなデカブツ、気持ちいいわけないい！」

腹まで愛液が飛び散る感じようからして、そろそろ頃合いだ。

織枝の尻を後ろから引きよせ、処女膜へと亀頭で接吻をする。織枝が下唇を噛んだのは痛みに耐えるためはずがない。木刀で痣ができるほど殴られても、眉の角度は横一直線なのが武蔵織枝である。楓もザナスも痛みに襲われた顔はしていないし、むしろ処女膜への圧迫が増すごとに口をだらしなく開けていく。

(こういう顔をエロいと思えるのは、人並みの感性になったってことかな)

複雑な心境ではあるが、人並みの欲情に身を任せて織枝の中に入りこんでいく。

肉膜を裂くにつれ、プツプツと泡の爆ぜるような感触が亀頭を叩いた。織枝は後ろから犯されて苦を訴えるどころか、みずから尻を押し出して結合を深めてくる。こぼれ落ちた破瓜の血が愛液と競うように太腿を伝った。

「んっ！ ああっ！ 恐う……も、もつと、乱暴にしてくれ！」



織枝は目の前の忍に大口を開いて、せひとも奥まで犯してくれと手招きするように舌を揺らめかせている。雄の獣性が煽られて、たまらない。

「そこまで言うなら、お望みどおりにしてやるよ！」

顔と頭を驚づかみにし、濡れそぼった口腔へとペニスを突きこむ。喉舌の蠢きと膣肉の震えに根元まで感じ入り、汗を帯びて美麗に輝く額を見下ろした。

「んぶっ、はおお……あむっ、ぐぼおっ、ああ……！」

破瓜の痛みと息苦しさとえずきに苛まれても、彼女の瞳は官能の色彩を深めていく。ペニスを締めつけてくる膣肉と頬肉に、忍は男らしく大きなストロークで応えた。

(くうう、き、気持ちよすぎてチンポが根元から腐りそうだ……！)

肛門括約筋と腹筋と大腿筋に力を入れ、射精を促そうとする前立腺の脈動を押さえつけた。そうでなければ、潤いに満ちた粘膜穴の快感に耐えられない。

淫らな熱に冒されているのは皆おなじで、楓も喘ぎを大にしているし、ザナスなどは挿入もまだなのに腰をよじらせて愛らしい惚け顔を披露していた。

「ふわあッ、んーッ！ ひッ、ひんッ、二重の快感、抗いがたい……んふああッ！」

「ま、まだまだ、これから三人分になるんだぞ！」

ザナスを後ろから抱えた忍が、小さな桃のように染まった秘部を亀頭で押しあげた。閉ざされた幼門がぶにゅりと歪み、ジユクジユクに濡れた果肉が吸いついてくる。ねじりながら彼女の身体を降ろしてみると、わずかな深みに先端が食いこんだ。

「くう……！ 母さんよりは大きいから、入るはずだ……！ 覚悟しろ……！」

「ああ、ふわあ……こ、このまま我が魔道の智を快楽に溶かそうとする腹づもりならば、踏みとどまるべきである……それは、大悟のためのお」

忍は話を聞かずに腕の力を抜いて、彼女の身体を落とすとともに、未通の秘門めがけて腰をあげた。ぐぶっ、ぶちゅり、と痛ましくも淫猥な音をともなうて、忍のペニスにすさまじい締めつけが訪れる。

「んううう！ ぐっ、んふうううう！」

ザナスは左右で色の違う目を剥き、とっさに両手で自分の口を塞いだ。

細い脚を揺さぶるようにして彼女を上下させ、往復しながらすこしずつ膣肉を掘り上げていく。残るふたりの快感が流入するので、破瓜の血と愛液は等量を保っている。押さえたい口から漏れだすのは苦痛のうめきでなく、甘美な喘ぎと大量のヨダレだ。

「子どもみたいなチビおま○このくせに、感じまくってるじゃないか。崇高な理念なんかより、こうやって奥までほじくられるほうが嬉しいだろ？」

織枝を犯している忍の影響で、ことさら強引な口ぶりや腰振りになってしまふ。軽くて小さいザナスの短身は面白いぐらい大きく弾んだ。内臓は爛熟した大人の女のように絡みついてくるが、子宮口を突くほど差しこんでも根元に届かない。口のヨダレに負けじとこぼれる愛液は、米のとき汁のように濁っていた。

楓と織枝も、ザナスに挿入した瞬間から膣肉の湿りと締めつけが数段増す。

「ザ、ザナス様あ、あんまり感じないでえ……！ あつ、ふあつ、楓、大人チンポで感じまくつちやうう！ んああッ！」

とある忍が楓の腹にまたがり、爆乳の狭間で肉棒を揺すっている。コリコリに固まった乳首を親指で擦ってやると、楓の顔はたやすくとろけた。複数の成熟した肉根で頬や額を叩かれても、我知らず舌を伸ばそうとまでするほどだ。

「んぐつ、ふんんう、す、すごい、狭いおま○こゴリゴリされながら、僕のおま○こもめちやくちやに犯されるの、ビクビクってなるんだあ……むぐつ、ぶばあ」

織枝は口からペニスを抜かれても、呼吸を整えるとすぐにしゃぶりつく。コツがわかってきたのか、舌を絡めながら喉を緩め、亀頭を深くまで受け入れてくれた。

喉奥と子宮口はリズムを合わせて同時に突いてやる。ただし楓とザナスとはペニスをずらして、多様な愉悅が同調して混ざりあうのを狙った。

楓には優しく、大人のペニスへの恐怖心がなくなるようじつくりと。ザナスにはできるだけ根元近くまで挿入し、円運動で小壺を拡張。亀頭で愛らしい子宮の入り口をぐりぐりと擦ってやると、小さな頂きに昇って気持ちよさげに痙攣する。

「はひい、んむううつ、ひつ、ひつ、ああああ……！」

まだまだ入り口程度の浅い絶頂だろうが、はじめてでこの反応は実に都合がよい。本来の目的にとっても、罪悪感という実に個人的な問題にとっても。

(痛がつてるよりも、感じてくれてるほうが可愛らしいもんな)



もつとよがり顔を見るため、まわりの忍が細い手を無理やり左右に開いた。ザナスは下唇を噛んで声を殺していたが、彼女を抱えた忍が膝をついて数本の男根へと魔道師の童顏を押し出すと、むせ返るような男の臭気に鼻を塞がれて息苦しさに顔を赤くする。

「あああ、んくうう……はああ、も、もう、ダメであるううう！」

口を開いた拍子に、溜まりに溜まった唾液が顎から双乳まで加速度的に落ちていく。くすぐったさに性感を刺激されたのか、つま先を反らせて硬直した。

「こ、交尾に心狂わされるとはあ……！ ひああああつ。く、狂うう、ぐるううう！」

魔球殻に閉じこもって何百年と過ごしていた彼女に、性感への耐性があるはずはない。口を押さえていたのが最後の砦だったのだろう。童顔や小さな手、細い脚を赤黒い肉棒でマッサージされて、喜悦の身悶えがどんどん大きくなる。

忍は嬉々として腰遣いを大きくした。一分の隙もない稚穴が肉棒に引っ張られて上下左右に動くたび、織枝と楓の媚尻も粘っこくよじれる。

「どうですか、先輩。ちっちゃい俺のチンポと今の俺のチンポ、どっちが好き？」

「いやああ、こっち好きになっちゃううう！ 子どもちんぽで満足できなくなっちゃううう！ 大人ちんぽでマンコがばがばになっちゃいそうなののおお！」

楓は乳肉を搾られると地面に頭を擦りつけてよがり狂う。

「織枝さんも強姦されて本当に満足そうですね。夢は叶いましたか？」

「も、もつとだ、喉にもつとお！ 夢の中だと、もつと乱暴だったからああ！」

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**

# キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- 雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
- 二次元ドリームマガジン・コミックアンリアル**のバックナンバー**も買えるよ!
- ジャンル別**で作品も選べて超便利!
- 二次元編集部**の愉快的Blog**も更新中!
- 期間限定で、文庫お買い上げの方に**オリジナルブックカバー**をプレゼント!



<http://www.comic- Valkyrie.com/>

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!



<http://www.cran-berry.com/>

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!



<http://www.mille-feuille.jp/>

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!



<http://www.2d-dream.jp/>

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!

